



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	地方分権が進むスコットランドとその言語事情
Author(s)	根本, 慎
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 2 号: 51-55
Issue Date	1999 年
DOI	10.15114/bshs.2.51
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6591">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6591</a>
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192251.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

## 地方分権が進むスコットランドとその言語事情\*

根 本 慎

札幌医科大学保健医療学部一般教育科

### 要 旨

英国の一地方であるスコットランドでは英国労働党が政権を担うことによって、以前から掲げていた政策が実行に移されつつあり、地方議会の開設も決まった。

スコットランドでは標準イギリス英語に近い標準スコットランド英語が用いられている一方で変異が見られる。更に、英語が浸透し始めた時代の特徴を残すスコット (Scots) や、英語が取り入れられる前に保持していた言語、ゲール語 (Gaelic) も一部で用いられているのが現在のスコットランドにおける言語社会の様相である。

〈索引用語〉 スコットランド、スコットランド英語、スコット

### はじめに

英国は、イングランド(England)、ウェールズ(Wales)、スコットランド(Scotland)、北アイルランド(Northern Ireland) からなる連合国家である。北アイルランドの設立は、1922年のアイルランド独立に際して取られた措置であるが、民族的にはウェールズ、スコットランド、北アイルランドは、ともにケルト系であり、アングロ・サクソンの系統であるイングランドとは対照的である。

このようなスコットランドにおいて、近年注目すべき出来事がいくつか見受けられた。その主なものに、1) スコットランドのシンボリック的存在である「運命の石 (The Stone of Destiny)」が、1996年秋に700年振りに返還されたこと、2) 1997年5月英国総選挙の結果、労働党政権が誕生、ブレア (Tony Blair) 政権の提案による住民投票の結果、スコットランド議会の開設が決まったことなどが挙げられる。政府の側から見ると、地方分権であるが、スコットランドの側からは自治権の拡大と受け取られている。

本稿では、このような変化の兆しを見せているスコットランドの言語社会について、歴史的側面を含め、最近の言語事情を報告する。

### 言語面から見たスコットランド

ローマ軍が紀元前55年イギリスにまで侵攻して来た

頃、現在のスコットランド地域には、ケルト系の種族が勢力を持っていた。ローマ軍の撤退後、ヨーロッパ大陸から渡来したアングロ・サクソン人が勢力を伸ばし、7王国を創り上げた。スコットランド地域を治めていたケルト系の人達の言語はゲール語 (Gaelic; Gàidhlig) であり、ゲルマン系のアングロ・サクソン人の言語は現代英国英語 (British English) につながる。

アングロ・サクソン系の7王国のうち、北のケルト系と地理的に接していたのがノーサンブリア (Northumbria) である。中期英語の頃に始まった北部英語との接触は次第に浸透し、14世紀には北部モーレイ湾に達した。この北部方言はスコットランドで発展して、14世紀から16世紀にはイングリシ (Inglis) と呼ばれるスコットランド英語 (Scots) となる。このスコットは他のイングランド方言に対して対等の地位を有していたが、いくつかの地域方言があり、英語との類似性を持ちながらも、文法項目、発音、語彙などに違いが見られた。しかし、宗教改革や王位の統合、議会の統合などはスコットランドでイングランド英語が広まる契機となった。

書き言葉が17世紀末、話し言葉では18世紀中頃に諸方言の共通語として標準スコットランド英語が成立した。今日、標準スコットランド英語はイングランド英語とほぼ同じと考えられ、教育を受けた中流以上の人であれば

このスコットランド英語を話している。

スコットを身につけ、用いるのは、育った環境やその必要度により異なる。労働者階層でスコットを話す人は多く、スコットと標準スコットランド英語を使い分けている人も多い。また、スコットで話はできて、書き言葉としては、標準スコットランド英語を使う人もいる。スコットはこの200年ほどの間衰退して来ていると考えられているが、その一方で、スコットを振興させようとする機運も見られる。学校教育の中に取り入れられており、政府や民間の機関が復興のために活動している<sup>1)</sup>。スコットを奨励することはゲール語の復興と共に、スコットランド住民の大切な遺産と考えられているからである。

歴史的に辿った過程からスコットランドで観察される言語としてゲール語がある。13世紀頃までは、アイルランドと同一のゲール語が分布していたと考えられる。その後分離発展したのが、スコットランド・ゲール語である。また、英語の浸透が進み、ゲール語が用いられる地域は次第に西北部海岸地帯とヘブリディーズ諸島(Hebrides)に限られるようになった。ゲール語人口は今世紀に入ってから減少し、1970年頃にはゲール語のみの話し手はいなくなった。しかしながら、英語との二言語併用者という観点から見ると僅かながら増えている<sup>2)</sup>。使用場面は限られていても、ゲール語を話すことに誇りを持つ人達があり、近年ゲール語を学ぶ環境が整えられて来ていることもその一因である。日常接することができるゲール語によるテレビ・ラジオの放送番組もある。大学ではゲール語のコースが開講されているが、スカイ島(Isle of Skye)のアーマディール(Armadale)には、ゲール語コースを始めケルトの伝統を伝える教育施設、サバル・モール・オスタイグ(Sabhal Mór Ostaig)がある。1999年度から正規の大学卒業生を送り出すことができる体制となった。

これらスコットやゲール語の振興はスコットランド住民の志気を高める一つの拠り所となっている。言語面から見ても、面積と人口の上からも、それほど広大な地域とは言えないスコットランドも一様ではないことが解る。

#### スコットランド英語・スコットの観察から

今回、グラスゴーを中心とした英語・スコットのほかに、ラジオのローカル番組(BBC-ラジオ・スコットランド)からの音声資料を観察した。その中で、変異音等に関していくつかの特徴が見受けられた。現代英国英語と系統的に共通するものを多く持ちながら、その歴史的経過の違いが見られる。

#### A. スコットランド英語：音声特徴

a) 全体的な音声特徴を挙げると、標準英国英語

(British English) と比べると、イントネーションの高低差が少ない。また、標準英語に比べると、ピッチが低く、第1アクセント、第2アクセントの区別が明瞭でないなどの特徴がある。そのため平板な聞こえになることが多い。それに加え、発話の速度が速く、聞き取りにくい場合がある。次のようなイントネーション型が見られた。

#### 標準イングランド英語

'See you later!'  
[sì: jù: læɪtə]

'check it'  
[tʃékɪt]

#### スコットランド英語

'See you later!'  
[sì: jù: læɪtá]

'check it'  
[tʃé:kɪt]

また、標準英語では閉音節であるのに対して、語末の位置で開音節化する傾向が見られた。

b) 子音の中で摩擦音、鼻音に類するもので音節主音的聞こえになるものがある。

fine[fáɪ n̩], machine[maʃí: n̩]

industry[ɪndəʃtrí], centre[sɛntá]

noises[nóɪ zɪz], bottom[bótəɪm]

weel/well[wé:l̩], place[pléɪs]

c) アクセントの位置が異なり、語末にアクセントがある開音節がある。語尾音節にアクセントがあつてすぐ休止するような聞こえとなる。時には最終音節のアクセントが一番強く聞こえることもある。そのため語尾の音は、渡り音(glide)ではなく母音の響きとなり、開音節に聞こえる<sup>3)</sup>。資料の中では長母音と短母音との中間程度の聞こえであった。

happy [ha: pí], sorry [sɔ: rí]

altar [ɔ: lt:á], later [læɪtá]

yesterday [jɛstɔ: dí], industry [ɪndəʃtrí]

d) アクセントのある母音に長音化の傾向が見られる。

check it [tʃé:k ɪt], well/weel [wé:l̩]

sittin (= sitting) [sí:tɪn]

message [mɛ́:sɪʒ], know [nó:]

e) 標準英語の[r]音に対して[R]音(舌端振動音)が子音の前に多く見られる。

mother [máð̥ə], girl [gæ̥rəl]

thirteen [θə̥rti:n], world [wḁ́rld]

commercial [kɔ̥mɛ̥rʃl]

この[R]音は音節主音的な聞こえがあるために、特徴のある聞こえとなる。この発音を保持する人は、標準スコットランド英語を用いる際にもその調音が現れる。

## B. スコットに見られる諸特徴<sup>4)</sup>

### a) 長母音の保持

スコットの語彙の中に、英語史の中で14世紀半ばから17世紀の初めに渡って進行した大母音推移(The Great Vowel Shift)の痕跡を見ることができる。中世英語で長母音を有していた語が、現代英語では二重母音に対応する語があるが、スコットではこの長母音を現在でも保持している。このため、発音・綴りが現代標準英語とは異なっている。

coo (= cow), noo (= now), mooth (= mouth)

hou (= how), mait (= meat), roun (= round)

mous/moose (= mouse), our/ur [u:R] (= hour)

### b) 現代英語標準英語とは異なる母音の例:

hame[hɛ:m] (= home), lang[laŋ] (= long)

syne[sen] (= since), maun[mɔ:n] (= must)

gae[gɛ:] (= go), awa[awɔ:] (= away)

### c) 現代標準英語とは異なる音: [hw], [x]

what[hwat], who[hwu:]

nicht[nixt] (= night)

muinlicht[mu:nlixt] (= moonlight)

### d) スコットに特徴的な綴り

ア) 発音は英語音に近くても綴りの異なるものがある。また、15世紀、16世紀から用いられている書記法(diagraph)が現在でも使われていて、綴りによって視覚的にスコットであることを示すものとなっている。

guid (= good), huise/hoose (= house)

buik (= book), heid (= head)

cauld/cowld (= cold), auld (= old)

イ) 綴りの異なりが発音の違いとなる。次の例では、子音の脱落に対応している。

a (= all), haud (= hold)

caa (= call), ba/baa (= ball)

waa (= wall), oo/woo (= wool)

次の例では、発音の違いも示している。

mak (= make), o (= of), certes (= certainly)

or (= before), or (= nor), nor (= north)

mither/midder (= mother), morn (= morning)

### ウ) 文法形態素の例

①動詞の過去形を示す形態素としての-(i)t, -d  
walkit (= walked), tellt/telld (= told)

None o them likit the schuil. (= None of them liked the school.)

②否定辞: nae (= no, not)

There's nae mair. (= There's no more.)

③否定の縮約形: -na, -ny (= -n't)

isna (= isn't), arena (= aren't)

coudna(e) (= couldn't), haena (= haven't)

didny (= didn't), canna (= can't)

canny (= can't), winny (= won't)

The phone isna workin.

Ye canna park here.

④分詞形態素: -in (= -ing)

flie-in (= flying), wytin (= waiting)

⑤前置詞・副詞の異形

標準英語で be- で始まる前置詞が a- で始まる語がある。

afore( = before), ahint( = behind)

ben( = through, in, within)

outwith( = outside, beyond)

なども前置詞並びに副詞として使われている。

I'll get home *afore* you.

Hing yer coat up *ahint* the door.

She was *ben* the kitchen making tea.

英語とスコットの使用状況について、何人かの人に直接質問を試みた。学生でも、スコットを殆ど用いず、時折単語を用いる程度という人から、普段の生活では標準スコットランド英語との割合はほぼ同じ程度という人まで様々であった。スコットは良く用いるという学生でも、自身のスコット表現が別な地域では通じにくいと述べていた。グラスゴーを中心とした最近のスコット表現を集めたものに *The Complete Patter*<sup>9)</sup>がある。この中からいくつかの表現を 東海岸出身者に提示して見たが、使用しない表現だという反応であった。スコット表現には地域的特性が強いと考えられる。

結 び

固有の歴史と伝統を持つスコットランドも、英国の一部であることに変わりはない。スコットランド以外の出身者もあり、また、スコットランドの未来像に関しても完全に纏まってはいない。そこにスコットランドとしての意見を集約することの難しさもあるが、地方分権を自治権の拡大と考える住民の多くは、独立が更に近づいて来たと考えている。

言語的には標準スコットランド英語、スコット、ゲール語の併用が見られ、これらの言語環境を維持しようとする活動も、それぞれの伝統を考慮した中で進行している。特にスコットを通して、現代英国英語の辿って来た過程を現在のスコットランドの言語社会の中で見ることができるのは、言語の一般的有り様を知る上でも貴重である。

スコットランドには、歴史・政治・社会的にイングランドとは異なる成り立ちと、周辺地域やヨーロッパ諸国と独自の結び付きがあった。このことは言語を初めとする諸関係が英国という地理的に限定された地域でありながらも多様であると言える。その多様性を尊重した上で国内の融和を計ろうとする英国政府の姿勢が、スコットランドで最近見られる一連の出来事に現れている。英国が、EUへの加盟を控え、国内の諸問題を克服する必要があることも一つの要因と考えられる。

注)

\*本稿は平成10年7月から9月にかけて英国のエディンバラ大学、グラスゴー大学に滞在した際に得られた資料に基づいている。

1) 初等中等教育の中で、スコットを取り入れている現状についての報告として次の資料がある。:

Niven, L. and R. Jackson (eds.), *The Scots Language : its place in education* (Dundee: Northern College, 1998).

民間の支援施設や大学が持つ資料をインターネットを通じて提供するプログラムも1998年の秋から始まった。グラスゴー大学(The University of Glasgow)、アーバーディーン大学(The University of Aberdeen)が提供しているウェブ・サイトはそれぞれ次の通りである。:

<http://www.arts.gla.ac.uk/STELLA/englink1.htm#Scots>  
<http://www.abdn.ac.uk/~ser045>

2) 亀井孝ほか(編),『言語学大辞典』(三省堂、1996), p.325.

3) 荒木一雄ほか(編),『現代英文法辞典』(三省堂、1992), p. 1306には、語末( \_\_ #)、有声摩擦音の前( \_\_ / v, ð, z /)、r音の前( \_\_ / r /)では、短母音が長母音となる記述がある。しかし、これとは環境が少し異なる。

4) スコットの基本語彙に関しては、次の作品を参照した。  
The Scots Language Society (ed.), *GLEG - Learning Scots in song and story* (Scotsoun, 1989).

5) Munro, Michael, *The Complete Patter* (Glasgow: Canogate Books, 1996).

## Scotland under Devolution and Its Speech Community

Makoto NEMOTO

Department of Liberal Arts and Sciences, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

### **Abstract**

The Labour Party in the United Kingdom has been promoting policies to transfer more administrative rights to the local bodies. The party came into power through the General Election of 1997. The idea of having a local parliament has been accepted by the local inhabitants in Scotland.

The purpose of this article is to give a factual description of the current state of the speech community. Other than the standard Scottish English, the speech community retains Scots – a variant of Scottish English. However, there are some local variations in the extent and prevalence of the Scots dialect and Gaelic language as well as the Scottish English.

Key words : Scotland, Scottish English, Scots